

デーノタメ遺跡の特質と重要性

—森と水辺に展開した巨大集落の実像—

明治大学 阿部芳郎

はじめに

北本市に所在するデーノタメ遺跡は、台地上の居住域とその直下の低地部が調査された稀有な遺跡である。しかも台地上に残された居住域は 60,000 m²にも及ぶ範囲の中に多数の竪穴住居址が広がることから関東地方最大級の集落遺跡と考えることができる。ここではこれまでの調査の成果として3つのポイントに絞りその重要性について説明したい。

1 約 1000 年にわたる人々の生活の舞台

台地上の集落部分は大きく中期中葉から後葉までの住居が集中する地点と、それに隣接して後期初頭から前葉の住居群が集中する地点から構成されている。さらに中期の住居群の内側に後期中葉の住居が複数発見されていることから、集落は隣接地を反復するように移動していたことがわかる。これらの集落からは、都合 10 型式余りの土器型式がほぼ連続して途切れることなく出土しているため、炭素年代を用いた場合、デーノタメ集落は約 1200 年にわたる人々の生活が行われたことがわった。この事実は縄文時代が高度な定住社会を形成していたことを示す重要な証拠である。

こうした長期間にわたる人々の居住活動を示す遺跡は東日本の縄文社会に特徴的に認められる。その中でもデーノタメ遺跡が注目されるのは、集落の形成期間が中期の中葉から後期中葉にまで至ることである。関東地方の多くの遺跡は中期と後期の間に断絶を挟み、2つの時期の集落が同一の場所に形成されることは非常に少ない。また後期の遺跡数が減少することから、中期と後期の間に気候寒冷化などの大きな環境の変動があり、大きく文化が衰退されたと考えられてきた。ただしこの解釈は十分な検証がなされているわけではなく、縄文時代研究の最重要課題の1つである。

デーノタメ遺跡は中期と後期にわたり継続した居住活動が認められることから、各時期毎の居住形態を検討することにより、この課題に答えを導くことができる。

2 低地部に保存されている豊富な植物遺存体の出土

一方、台地の下には良好な泥炭層の堆積が確認されている。また、花粉分析ではウルシの花

粉が検出されているため、周囲にウルシ林が存在したことが考えられる。クルミやドングリなどの堅果類も豊富に出土しており、当時の食生活の解明に重要な資料である。

また中期の泥炭層の上には後期の泥炭層が一部で重なり合って検出されている点は重要である。とくに後期ではトチの果皮が厚く堆積した地点が確認されている。これらの堆積物は、ちょうど台地上の集落の形成時期とも一致しており、集落直下での低地利用の実態が初めて明らかにできる貴重な事例である。

近年の研究の進展により縄文人の主食は堅果類などの植物質食料であることが人骨の安定同位体を用いた古食性分析などから明らかにされている。しかし、台地上の集落では炭化しない限り、ほとんど遺存することがない。動物資源は貝塚の動物遺存体の分析から詳細が明らかにされているが、主食の内容は不明確なままであった。デーノタメ遺跡の泥炭層は多くの植物質食料の残滓を出土しており、また花粉やプラント・オパール分析から植生復元も可能であるため、縄文時代中期から後期にかけての環境変化とそれに適応した人々の活動痕跡が良好に保存されている点で極めて重要である。

3 5000年前の漆文化の実態解明

低地部からの調査で当初から話題を呼んだ遺物の1つに中期の漆塗り土器がある。デーノタメ遺跡の場合は浅鉢形土器の内面に赤色と黒色で文様を描くものが多い。漆は台地上ではバクテリアや紫外線によって劣化してしまい、ほとんど残存しない。泥炭層はそうした遺物を良好に保存する環境を形成している。

縄文時代の漆利用技術の中で関東地方の中期は漆工芸技術の1つの画期ともいえる。一方で東日本最大級の集落として著名な青森県三内丸山遺跡では、漆塗りの製品は極めて乏しく、明らかにこの時期の漆工芸技術の中心が関東地方にあったことを示している。しかも、その主体は土器に漆で文様を描く陶胎漆器である。出土した資料には複数の漆文様の描き方があり、また赤色顔料の塊やウルシの花粉も検出されていることから、デーノタメ遺跡ではウルシ林を管理し、そこから樹液を採取して漆工芸を担う人々が存在した可能性が高い。

漆塗り土器の理化学分析を行うことにより、約5000年前の漆工芸技術の実態が解明できる。

4 期待される遺跡の保存と活用

デーノタメ遺跡は台地上の大規模な居住域とそれに付随して利用された低地の泥炭層が一体となり良好な状況で残されているきわめて稀有な遺跡である。今や遺跡は住居などの居住域だけではなく、周囲の利用空間をも含めた範囲の保存と活用が望まれてきているが、そうした条件を満たす遺跡は極めて少ない。デーノタメ遺跡はその稀有な候補の1つと言って良い。

これまで関東地方の縄文時代遺跡は生業復元の手がかりの多い海浜部の貝塚遺跡が多く保存されてきたが、デーノタメ遺跡は海浜部には見られない内陸部での豊かな生活の実態を伝えるものであり、東日本の縄文時代を代表する遺跡の1つと考えることができる。